



## ワークショップA 「読書指導にデジタル教科書を活用しよう」

中川一史(独立行政法人メディア教育開発センター) 青山由紀(筑波大学附属小学校)

このワークショップのキーワードは、「読書指導」「デジタル」「活用」の三つです。デジタル教科書を使って繰り返しの表現に着目させるという「ずうっと、ずっと、大すきだよ」の実践。それをヒントにして、参加者自身がデジタル教科書に触れながら、読書指導へつなげるような活用のしかたを考えていきました。

### 「ずうっと、ずっと、大すきだよ」の実践紹介（青山先生）

読書生活へ結ぶということ考えたときに大切なのは、授業で学んだ読み方が、ほかのお話を読むときにも活用できることだ。そこで、後の読書に活用できるよう、繰り返しの表現に着目して「ずうっと、ずっと、大すきだよ」を読み進めることにした。



1年生の子どもたちにとって、物語全体を貫いて繰り返されている表現を見つけるのは簡単なことではない。繰り返しの言葉をみんなで確認していきたいときに、教科書紙面を大きく提示したり、ラインを引いたりすることができるデジタル教科書はとても有効なものだった。その後、活用までのステップとして、教科書上下巻で学習してきた物語の中から、繰り返しの表現を探すという課題を設けた。その際、子どもたちが見つけてきた繰り返しの表現を、デジタル教科書ですぐに提示して、みんなで確認することができた。

### デジタル教科書の解説・ワークショップの活動発表（中川先生）

この実践でデジタル教科書を使ったことの効果として、主に次の2点が挙げられる。紙の教科書とはまた違ったよさがあることが分かるだろう。

- ①前に学習したことと対比したいときにすぐ提示し、単元を越えた指導をすることができる。
- ②ラインを引くことで、子どもたちの目線を焦点化することができる。

教科書をデジタル化した教材(デジタル教科書)には、さまざまな機能がある。

- ・教科書拡大提示機能(教科書ビュー／本文ビュー)
- ・挿絵を移動する機能(挿絵ウインドウ)
- ・朗読機能

- ・ツール(筆箱、吹き出し、スタンプ)
- ・新出漢字の動画コンテンツ(筆順アニメーション)
- ・参考資料(ワークシート、動画クリップ、静止画、説明資料、歌・資料音)

ワークショップの活動として、6グループ(2, 3, 4, 5年)に分かれて、読書指導のための、デジタル教科書の有効な活用場面を学年別に考え、発表していただく。最後に青山先生から6年生での実践を紹介していただくことで、このワークショップの時間内で1～6年生までの活用場面を網羅したい。

### グループワーク（20分間）

実際にデジタル教科書に触れてみて、読書指導のための活用のしかたをグループで話し合う。



### 発表（枠内は講師のコメント）

**2年生** 「スイミー」で使う。挿絵だけを取り出して見せたり、挿絵を移動させて泳いでいるイメージをふくらませたりする。

- ・文字が上に載っていない挿絵というのは、物語への同化を促す点でもとてもよい(青山)。
- ・拡大提示というのは、子どもたちの意欲を高めるのにたいへん効果的である(中川)。

**3年生** 「すがたをかえる大豆」で使う。参考資料にある文章構成図を使って、子どもたちといっしょに、段落をかたまりごとに分けていく。

- ・加えて、ラインを引くことで、それぞれの段落の中の特徴がはっきり見えたり、接続語に目が向いたりする(青山)。
- ・子どもたちといっしょに操作をしながら確認していくことができるのはよい(中川)。

**4年生①** 「『伝え合う』ということ」で使う。点字の写真を拡大提示して、その存在をはっきり見せる。また参考資料にある動画ク

リップを使って、点字を打つ様子を見せたい。ほかに、「アップとルーズで伝える」で使う。挿絵写真を拡大提示することで、「アップ」という手法にどんな特徴があるのかが実感できる。

- ・「アップとルーズで伝える」は、文章と写真の対応がとても重要な教材である。どの段落がどういう内容を指しているのか、文章構成図を動かしながら、意味段落について学習していくのもよいだろう(青山)。
- ・「アップとルーズで伝える」の後に続く「四年三組から発信します」では、電子情報ボードもしくはプロジェクトとデジタルカメラをつないで、撮ってきた写真を大きく映しながら、効果的な写真を選ぶことができる(中川)。

**4年生②** 「一つの花」で使う。3年生で学習した「ちいちゃんのかげおくり」の挿絵を拡大提示しながら読み聞かせをすれば、戦争がどういうものなのかを思い出してから学習に入ることができる。二つの作品の最終場面の挿絵を提示して比較させ、どちらも花の中を歩いていく絵なのに意味やイメージがまったく異なることに気づかせたい。

- ・「ちいちゃんのかげおくり」と「一つの花」の最終場面の比較はたいへん興味深い。今後、取り入れてみたい(青山)
- ・プリントアウトした小さな紙で比較するのではなく、すぐに大きな画面で比較してみることができるところにデジタルのよさがある(中川)。

**5年生①** 「千年の釘にいどむ」で使う。釘の写真を拡大提示することで、釘が曲がっている様子がよく分かり、そのすごさがより伝わってくる。参考資料にある動画クリップ「釘の移り変わり」は、読みを広げるのによい。

- ・子どもたちが「すごい」と感じるのは、古代の釘についてなのか、白鷹さんのやっていることについてなのか。読みながらはっきりさせていこうにしたい。そのときに、図や写真は大きな役割を担うのだと思う(青山)。
- ・写真の拡大提示は、「いろいろな くちばし」や「分類ということ」でも使える手法だ。動画も静止画もすぐに切り替えて見せられるのは便利である(中川)。

**6年生②** 「新しい友達」で使う。この作品では現在と過去の切り替えをおさえ、「わらぐつの中の神様」につなげたい。過去の回想部分がどこまでなのか、紙面を拡大提示し、切り替わるところにペンツールで印をつけていく。みんなで確認しながら読み進めることができる。

- ・「新しい友達」で現在と過去の切り替えが読めても、ほかの作品では読めないということでは読書生活につながっていかない。「わらぐつの中の神様」でより複雑な構造を学習し、他に生かせる読書のしかたを学習させたい。ペンツールもよいが、ラインを文章の下に横に引くという方法もある(青山)。

- ・拡大提示を使うと、みんなで確認しておさえるということがしやすい。画面に直接書き込んだり消したりできるのも使いやすい点といえる(中川)。

### 「森へ」の実践紹介 (青山先生)

「森へ」は、五感をはたらかせながら、文章と写真を併せて読んでいく教材である。ただ、実際に体験したことがないような世界が描かれているので、子どもたちをうまく引き込まなければならぬ。写真をスクリーンいっぱい拡大して見せることで、それが可能となる。たとえば、「地面に横たわる古い倒木の上から、巨木が一行に並んでのびている」部分は、紙の教科書にある写真だけでは小さくてなかなか分かりにくく、文章と併せて読んでいきにくいところである。拡大提示によって、細かいところにもよく気づくことができる。この文章でもっとも大切な「新しい生命に引き継がれていく」ということが理解できる。

五感を使って読むことに向いた教材なので、以前、「五感マップ」を作りながら読んでいくという実践を行ったことがある。今日は、そのマップをお持ちした。これはデジタル教科書を取り入れる前の実践だが、それでも子どもたちはこれだけ広がりのあるマップを作ることができた。デジタル教科書を使って拡大提示をし、作品世界に入り込めるような工夫をより丁寧に行えば、もっとよいマップができそうだと考えているところだ。グループ内で、それぞれに感覚の担当(視覚、聴覚など)を決めて透明シートにマップを作っていく、できたところでそれらを重ねて見るというのもおもしろい。どの感覚から読んでも同じところに集約していくことに気づくことができるだろう。

### まとめ (中川先生)

デジタル教科書の活用効果として、以下の点が挙げられる。

- ・集中度・意欲の高まり
- ・共有化
- ・焦点化
- ・イメージ化
- ・思考の視覚化
- ・児童の思考に合わせた授業デザインへの対応
- ・読書指導の資料
- ・手間の軽減
- ・時間の短縮
- ・教材研究のツールとして

これらの活用効果を意識し、意図に合わせてうまく取り入れていくことで、より効果的な学習が期待できる。今日のワークショップで考えたことを今後の授業に生かしていただきたい。

